

杉野学園衣裳博物館収蔵品調査

—浮世絵の収蔵状況について—

Sugino Costume Museum Collection Study
Investigation of Ukiyoe Collection

杉村 祐貴子
SUGIMURA, Yukiko

1. はじめに

杉野学園衣裳博物館（以下衣裳博物館）では、錦絵と称される浮世絵の木版画を31点（内1点重複）収蔵している。『浮世絵の歴史』⁽¹⁾によると、錦絵とは、明和2（1765）年以降に板行された多色摺の木版画のことを指すとされており、当館の収蔵する作品は全てこれに該当する。

作品の内26点が、1981～84年の間に受け入れたとされており、他に、1957年と95年に1点ずつ、1999年には個人より3点寄贈されている。また、三枚続の内1枚のみを収蔵している作品が4点あるが、当初より不足した状態で受け入れが行われたのか、受け入れ後に紛失したのかは不明である。

収蔵経緯等の記録は一切残されておらず、その後調査研究がなされた形跡もない。資料の活用としては、展覧会に出品した最も古い記録が2006年とされており、長らく展示されることなく保管されていた可能性が高い。

衣裳博物館では、2018年度より浮世絵の保存環境の改善、並びに資料調査に取り組んでいる。作品の殆どが、四隅を通常の厚紙に糊付けされた状態で保管されていたことから、それらを取り除き、保存方法も木版画に適したものへと改めた。また、現在登録されている資料情報も不可解な点が多く、見直しを進めている。長い間作品に対して適切な対応が取られてこなかった背景には、当館が服飾に特化した博物館として運営されており、こうした木版画の取り扱いに不慣れであったことが考えられる。

浮世絵は、描かれた当時の風俗を知るうえで貴重な資料となっており、服飾表現においても例外ではない。収蔵されるに留まっていたこれらの作品を展示に

も活用するべく、衣裳博物館では、引き続き資料の調査を進めている。

本稿では、現状における浮世絵の収蔵状況について整理し、報告する。

2. 保存方法について

当館が収蔵する浮世絵は、長い間適切な環境で保管されておらず、温湿度管理のされていない保存室に、一般的な容器に収納された状態で収蔵されていた。

2014年に既存の容器から取り出し、脱酸素処理を行なったが、以降そのままの状態でも保管されており、本格的な保存環境の改善へと取り組んだのは、2018年になってからのことである。

第一に、脱酸素状態の浮世絵を開封し、作品の状態を確認することから始めた。長い間展示されることなく保管されていたためか、全体として褪色はあまり進んでおらず、状態も一部の作品を除き、比較的良好であった。しかし、作品は1枚ごとに四隅を強力な接着剤で台紙に固定されており、劣化により、多くの作品は接着部分が破れた状態で台紙に付着していた。また、台紙自体の劣化も著しく、酸化が進んだ状態であったため、作品を台紙から取り外し、保存方法を改めることとした。

変更後の方法としては、作品を1枚ごとにあたりの柔らかい薄葉紙で挟み、その後作品別に厚地のピュアマット紙に納めた（図1）。薄葉紙、ピュアマット紙には、ともに中性でガス吸着機能のあるものを使用している。それらをアーカイバルボードで作成した保存箱の中に収納し（図2）、現在は温湿度管理のされた収蔵庫にて保管している。

当館には紙資料を扱う専門の学芸員はいないため、

これ以上の劣化を防ぐ、という点に重きをおき、方法を改めることとした。保存容器の中性化、汚染ガスの吸着、そして温湿度の管理と、以前よりは良好な環境を整えることができた。



図1 作品ごとの収納の様子



図2 保存箱への収納の様子

3. 収蔵作品一覧

当館が収蔵する作品31点を、(表1)に一覧で示す。なお、特記のないものに関しては、すべて三枚続の作品である。

4. 絵師一覧

当館が収蔵する作品の絵師12名について、活動時期の早い絵師より順に、(表2)に一覧で示す。

5. 収蔵傾向について

先述した通り、当館における浮世絵作品の収蔵経緯については、過去の記録が残されておらず、どのような目的で蒐集されたのかも不明となっている。

ここで、作品に描かれた事柄を見てみると、当館が収蔵する浮世絵作品31点の内、23点に洋装姿の人物が描かれていることがわかった。また、他にも蚕から織物が出来るまでの工程や、裁縫姿、束髪の種類について描いたものなども蒐集されており、服飾や装いに関する作品が多くを占めていることがわかる。

年代としては、万延元(1860)年、文久元(1861)年に板行された「横浜絵」と称される作品を、合わせて4点収蔵している。

神奈川県立歴史博物館の桑山童奈氏によると、横浜絵とは、横浜開港以降に出版された浮世絵の中で、横浜開港がきっかけとなって描かれたとみなされるものを後世に分類したものとしており、その中には外国の様子や外国人の姿を描いたものも含まれるという⁽²⁾。

こうした横浜絵の中には、当時の外国における流行の装いを、数多く見受けられることができる。当館が収蔵する作品にも、男性はフロックコートや燕尾服、軍服、礼服姿で、女性は大きく広がったスカートが特徴であるクリノリン・スタイルの姿で描かれている。しかし、これらのファッションはあくまでも外国人のためのものであり、日本人にとっては縁遠いものであった。

とはいえ、実際に着用されることはなくとも、幕末の開港期に、こうした洋装姿の描かれた浮世絵が広く板行されていたことは、重要な出来事である。日本の洋装化について語る際、多くの場合において明治期を中心に展開されるが、しかし、それ以前、横浜絵を介して、すでに日本人と洋装との接触は始まっていたのである。

当館の収蔵作品の中で、最も多くの割合を占めるのが、「開化絵」と称される一連の浮世絵作品である。明治20年代に板行されたものが31点中20点と全体の中でも多くを占め、内18点が明治20~23(1887~90)年の間に描かれている。

開化絵とは、文明開化による変化を描いたものであり、描かれる対象は横浜から文明開化の中心地である東京へと移行した。近代的な建物や汽車、ガス灯などといった、文明開化を象徴する街並の様子が描かれ、洋装姿の日本人も描かれるようになった。

日本の女性たちの洋装化を牽引した、昭憲皇太后が始めて洋装姿で公の場へと現れたのは、明治19(1886)年のことであるが、その当時の流行は、横浜絵に描かれたクリノリン・スタイルから、スカートの後ろ部分へボリュームをもたせた、バツル・スタイルへと移行していた。このバツル・スタイルは開化絵のひとつの象徴となっており、当館の収蔵作品の中にも、数多く描かれている。

表1 収蔵作品一覧

No.	作 品 名	絵 師	時 代	受入番号
1	徳川時代貴婦人の図（三枚続の作品15組、画帖仕立）	楊洲（橋本）周延	明治時代	160
2	亜墨利加国蒸気車往来（三枚続の内1枚のみ収蔵）	歌川芳員	文久元年（1861）	660
3	阿蘭陀国（一枚もの）	歌川芳員	万延元年（1860）	661
4	異国人酒宴遊楽之図（三枚続の内1枚のみ収蔵）	歌川芳員	万延元年（1860）	662
5	鬢附束髪図会（三枚組物の一）	楊洲（橋本）周延	明治20年（1887）	663
6	鬢附束髪図会（三枚組物の一）	楊洲（橋本）周延	明治20年（1887）	664
7	鬢附束髪図会（三枚組物の一）	楊洲（橋本）周延	明治20年（1887）	665
8	間化三十六会席 品川町万林（一枚もの）	豊原国周	明治11年（1878）	666
9	横浜異人商館売場之図（三枚続の内1枚のみ収蔵）	橋本貞秀	文久元年（1861）	667
10	皇后宮御製唱歌（二枚続）	豊原国周	明治21年（1888）	668
11	婦女礼式図解	楊洲（橋本）周延	明治23年（1890）	669
12	教育誉之手術	東州勝月	明治26年（1893）	670
13	貴女裁縫之図	安達吟光	明治20年（1887）	671
14	雪中梅荘群児遊戯図	楊洲（橋本）周延	明治20年（1887）	672
15	男児池上二小舟を浮む	楊洲（橋本）周延	明治20年（1887）	673
16	日本寿豊之図	楊斎延一	大正元年（1912）	674
17	上野公園博覧会行幸之図	小林幾英	明治23年（1890）	675
18	内国第三博覧会	楊斎延一	明治23年（1890）	676
19	上野公園地第三回内国博覧会行幸之図	東州勝月	明治23年（1890）	677
20	第三回内国勸業博覧会図	豊原国周	明治23年（1890）	678
21	第三回内国勸業博覧会図	豊原国周	明治23年（1890）	679
22	現世佳人集	楊洲（橋本）周延	明治23年（1890）	680
23	禱龍館繁栄之図	歌川国貞	明治24年（1891）	681
24	舶来和物戯道具調法くらべ	歌川芳藤	明治6年（1873）	682
25	七福人婚礼之図	歌川房種	年代不詳	683
26	欧州管絃楽合奏之図	楊洲（橋本）周延	明治22年（1889）	684
27	女織蚕手業草（十二枚続）	喜多川歌麿	寛政後期（1800年頃）	685
28	花競美人揃（一枚もの）	橋本貞秀	江戸時代	776
29	踏舞会 上野櫻花観遊ノ図	楊洲（橋本）周延	明治20年（1887）	798
30	欧州管絃楽合奏之図（三枚続の内1枚のみ収蔵）	楊洲（橋本）周延	明治22年（1889）	799
31	高貴演劇遊覧ノ図	楊洲（橋本）周延	明治20年（1887）	800

表2 絵師一覧

No.	絵師	活動時期	収蔵点数	特徴
1	喜多川歌麿 宝暦3年(1753)－文化3年(1806)	安政4年(1775) －文化3年(1806)	1	島山石燕の門人で、美人大首絵という、新しい様式の美人画を生み出し、美人画の第一人者となった。評判の水茶屋の美人や遊女、町家の女など、様々な立場の女性に題材を求め、美人画を数多く手掛けた。
2	橋本貞秀 文化4年(1807)－死没年不詳	文政9年(1826) －明治8年(1875)頃	2	歌川国貞の門人で、美人画、武者絵、風景画、横浜絵、団扇絵など、幅広く作品を手掛けた。緻密な描写が特徴であり、横浜絵に描かれる洋服の模写も、他の絵師たちと比べ、詳細に描かれているものが多い。
3	歌川国貞 2代 文政6年(1823)－明治13年(1880)	嘉永3年(1850)頃 －明治初期	1	初代歌川国貞の門人で、美人画、役者絵などを多く手掛けた。
4	歌川芳員 生没年不詳	嘉永期(1848－55) －明治3年(1870)頃	3	歌川国芳の門人で、横浜絵の先駆者のひとりとして知られるが、その経歴はよくわかっていない。他に、武者絵、花鳥絵なども描いている。
5	歌川芳藤 文政11年(1828)－明治20年(1887)	嘉永期(1848－55) －明治20年(1887)	1	歌川国芳の門人で、横浜絵の他、武者絵や開化絵、すごろくなど、幅広く手掛けたが、後におもちゃ絵を専門として活動し、名を馳せた。
6	豊原国周 天保6年(1835)－明治33年(1900)	安政元年(1854)頃 －明治33年(1900)	4	豊原周信及び歌川国貞の門人で、役者絵を最も得意とし、数多くの作品を残した。
7	歌川房種 生没年不詳	安政期(1855－60) －明治30年(1897)頃	1	歌川貞房の門人で、風景画や芝居絵、源氏絵等を描いていたが、明治時代に入ると、開化絵や戦争画を手掛けるようになる。また、小説や新聞の挿絵も手掛けており、その活動は幅広いものである。
8	楊洲(橋本)周延 天保9年(1838)－大正元年(1912)	慶応3年(1867) －明治40年(1907)頃	12	歌川国芳、国貞に支持した後、豊原国周の門人となる。名所絵、宮廷画、風俗画、戦争画など、描いた作品は幅広く、その数量も多い。中でも力を注いだのが美人画であり、明治の美人画の第一人者として知られている。
9	安達吟光 生没年不詳	明治3年(1870)頃 －33年(1900)頃	1	西南戦争、国会開設、戦争画等、報道画を主に手掛けている。風俗画、役者絵、芝居絵なども描いており、当館が収蔵する「貴女裁縫之図」も、服飾資料として頻出する作品である。
10	小林幾英 生没年不詳	明治18年(1885)頃 －明治31年(1898)頃	1	落合芳幾の門人で、風俗画、名所絵、戦争画などを多く手掛けている。
11	楊斎延一 明治5年(1872)－昭和19年(1944)	明治20年(1887) －40年(1907)頃	2	橋本周延の門人で、美人画、風俗画、博覧会や憲法発布式、国会開設について描いたほか、名所絵や戦争画など、幅広く手掛けた。
12	東洲勝月 生没年不詳	明治20年代	2	憲法発布式や博覧会について描いた作品が多いが、当館が収蔵する「教育營之手術」も、勝月の作品として有名である。

参考 原色浮世絵大百科事典編集委員会編『原色浮世絵大百科事典 第二巻 浮世絵師』

開港期における西洋文明の流入、そして明治20年代における西洋文明の定着という2つの時代は、日本の洋装化について考察する上でも、重要な時代となっている。開港期にはまだ外国人のものであった洋服を、明治期にはすでに日本人が着用していた。そうした、日本における洋装への移行の流れは、浮世絵の中にも見ることができる。

収蔵作品の描写、年代の傾向から、また、当館が服飾に特化した博物館として運営されてきたという前提からも、浮世絵作品が服飾資料の一環として蒐集されたことは間違いないといえるだろう。また、明治20年代の作品を最も多く収蔵しており、その多くに日本人女性の洋装姿が描かれていることから、日本の洋装化についての補足資料としての意味合いが強いものと考えられる。

6. おわりに

2018年度より、衣裳博物館では、浮世絵作品の保存、並びに資料調査に取り組んできた。これまで、資料を体系的に調査したことはなく、今回の報告を通して、当館の収蔵資料の現状を明らかにすることができた。また、当館における浮世絵作品の収蔵傾向を把握したことで、今後の活用への方向性も確認することができた。

服飾資料というと、洋服や着物、それらに付随する服飾小物類など、いわゆる着るもの、身に付けるものといった立体物に目を向けがちである。しかし、装いとは、時代性や社会背景と深く結びついたものであり、両者を色濃く映し出す浮世絵は、重要な服飾資料となり得る。描かれた事柄を総体的に読み解くことで、立体物だけでは知り得なかった、装いの全体像を窺い知ることができるのである。

資料に関しては、依然不明な点も数多く残されており、これからの調査が待たれる。また、当館が収蔵する作品の多くが開化絵に属する浮世絵であることから、開化絵と日本洋装化との関連性も、今後考察を進めていきたい。衣裳博物館では、浮世絵を服飾資料の一部と位置づけ、今後も保存、調査、作品の活用へと注力していきたいと考える。

註

- (1) 小林忠監修『浮世絵の歴史 カラー版』美術出版社 1998 p.5
- (2) 桑山童奈「開港160年〈再発見〉横浜浮世絵」『横浜開港160年 横浜浮世絵』神奈川県立歴史博

註以外の参考文献

- ・神奈川県立歴史博物館編『横浜浮世絵：集大成』有隣堂 1979
- ・原色浮世絵大百科事典編集委員会編『原色浮世絵大百科事典 第二巻 浮世絵師』大修館書店 1982
- ・宗像盛久編『横浜開化錦絵を読む』東京堂出版 2000
- ・『日本の美術 No.328 横浜版画、開化絵』至文堂 1993年9月
- ・野々上慶一編著『双書 美術の泉36 文明開化風俗づくし横浜絵と開化絵』岩崎美術社 1978
- ・中山千代『日本婦人洋装史』吉川弘文館 1987
- ・植木淑子「昭憲皇太后と洋装」『明治聖徳記念学会紀要』復刊第50号 2013年11月

図版出典

- 図1・2 筆者撮影